

グローバル教員養成プログラム「インドネシアの小、中、大学視察」 —アフマドダフラン大学とのオンライン研究交流会に参加して—

Report on “Indonesian Primary, Secondary School and University Visit” as a Global Teacher Training Program: Participation to Online Research Exchange with Ahmad Dahlan University

井上省吾, 石原優人, 谷川夏菜子, 南野敏男,
角屋志帆, 眞鍋志野, 日下智志

Shogo INOUE, Yuto ISHIHARA, Kanako TANIKAWA, Toshio MINAMINO,
Shiho KADOYA, Shino MANABE, Satoshi KUSAKA

鳴門教育大学
Naruto University of Education

1. 目的および活動内容

本プログラムの目的は、インドネシアのアフマドダフラン大学 (Ahmad Dahlan University) の大学院生と定期的なオンライン研究交流会及び現地訪問を通して、日本とインドネシアの学校教育について議論することにより、学校教育に関する視野を広げ、グローバルな視点を培い、グローバル教員としての素養を身につけることである。コロナ禍により現地渡航が叶わない中、アフマドダフラン大学の大学院生と月に一回オンライン研究交流会を継続して実施した。研究交流会では、双方の学生が自身の研究について発表し、その後発表内容について全体で議論した。

2. 活動日程

2022年10月末現在、合同カンファレンスを含め合計5回の交流会を以下の通り実施した。

2022年5月27日(金)：第1回研究交流会
2022年6月24日(金)：第2回研究交流会
2022年7月21日(木)：第3回研究交流会
2022年7月29日(金)：タイ・マレーシア・インドネシアの大学との合同カンファレンス
2022年10月14日(金)：第4回研究交流会



図1. 研究交流会の様子。

3. 各交流会の詳細

第1回から第3回までの交流会の詳細を以下に記載する。

(1) 第1回研究交流会

日 時：2022年5月27日(金) 18:00～19:30

参加人数：鳴門教育大学6人、

アフマドダフラン大学20人

発表者：鳴門教育大学 井上省吾、

アフマドダフラン大学 Tri Dessy Damayanti

発表内容：鳴門教育大学『日本のコミュニティ・スクールシステムについて』

アフマドダフラン大学『学生の数学的リテラシー能力を向上させるための問題解決学習型 e-MODULES 教材の開発』

質疑応答：

(アフマドダフラン大学→鳴門教育大学)

・今回の発表は研究に興味のある分野の紹介か、それとも現在行っている研究か。

→四国内のCSの取組に焦点をあて現在取り組んでいる研究の一部である。

- ・今回の発表は事例研究であるが、研究の後は日本のコミュニティ・スクールの活動に対して何か提案していくつもりか。
→現在大学院生であるが、同時に現職の教員である。卒業後は学校現場に戻るため、自分が働いている地域に今回の研究結果を還元したいと考えている。
- ・なぜ研究テーマとしてコミュニティ・スクールを選択したのか。
→教育と同時に地域開発にも興味があり、いままで多くの発展途上国を訪問した経験がある。その中で、教育が地域の発展に関与する最も大切なもののひとつであると気づいた。故郷では人口減少や高齢化の影響を受けて、地域の力が弱まってきていると感じる。そのため、教育を通して地域に活力を与えることができないか考えたのが、この研究を始めた理由である。
- ・コミュニティ・スクール制度を活用した教育活動で子どもたちの将来にとって役立つと思う活動はあるか。
→これはある地域の一例であるが、地域と共に防災教育を進めている学校がある。近い将来大きな地震が起こる危険性があるという地域課題に対して、地域や学校の連携しながら教育活動を行うことで、地域の防災への取組を学生の防災意識や地域に貢献しようとする意識を高めようとしている。
- ・そういった学習はカリキュラムに取り入れられているのか。
→主に年間計画に位置付け総合的な学習の時間に行なわれていることが多いが、学校行事として行っている学校もある。社会教育として学校外の教育として実践されている地域もある。
- ・地域と連携した学校教育の例で自然体験学習と記載があったが、日本の具体的な事例を教えてください。
→NPOと協力した環境教育学習や、農家と協力した農業体験学習をおこなっている。夏休みの学校外の教育活動として、小学生などで虫や魚をとる活動を行うなど、地域の自然の多様性を体験させる活動を行っているようである。
- ・今回のケーススタディとして、日本のだけでなく海外、特に先進国の事例を調査するとより良くなると思う。
→日本の教員なので現在は日本の事例に焦点を置いているが、将来的には途上国や先進国の事例も調査しながら、地域連携について広い視点で考えていけたらと思っている。

(鳴門教育大学→アフマドダフラン大学)

- ・e-MODULEについてもう少し教えてください。

→electric moduleという学習教材で論理的に学習を行うことができる。インターネット上にアクセスできる教材ではなくPDFのような形式的なファイルで、オンライン・オフライン関わらず学習に取り組むことができるサポート教材である。

- ・誰がこの教材を作成するのか。
→発表者が自分で作った。良い教材ができれば、学校に対してこの教材の使用を提案していきたいと考えている。
- ・問題解決型学習について、インドネシアの現在の課題は何か。
→学生が活発に活動しないところだと感じる。教師側の問題もあり、教材や指導が問題解決型学習に対応していないという課題もある。
- ・ICT機器の使用はインドネシアの学校でどの教科でも普通に行われているのか。
→授業でのICT機器の使用は一般的ではない。e-MODULEはスマートフォンでも使用ができるため、ほとんどの学生はPCよりもスマートフォンで活用すると考えている。
- ・学生はスマートフォンを使用しながら、授業をおこなっているのか
→学校の方針によって異なるが、教師が学生に持ってくるように指示をして使うことがある。
- ・インドネシアの教育制度では何歳から小学校教育を始めるのか。また義務教育はどの段階までか。
→小学校は6歳から12歳までで18歳までが義務教育である。日本と同じ6-3-3システムを取っている。

発表者の所感：

初めての交流会ということもありお互いに緊張しながら交流を行っていたように感じた。共に教育を専攻としているものの、インドネシア側と日本語側の学生で専門とする分野が異なっているため、発表する内容が難しいと感じるところがあった。今回は日本のコミュニティ・スクールについての発表を行ったが、インドネシアでも学校と地域の連携は進んでおり、共通する点があるとわかったことは大きな収穫であった。事例研究として、海外の事例も取り込みながら研究を進めていくとよいというコメントもいただき、これからの研究に積極的に取り入れていきたい。インドネシア側の発表は算数・数学教育で活用できるe-MODULE教材開発とその効果についてであった。情報機器の整備環境の違いからスマートフォンでも利用できるオリジナル教材を開発しているという点が興味深かった。日本でもインドネシアでも教師がオリジナルの教材を作り、担当する学生に提供している。教材づくりは時間がかかる

ものである。お互いの国の教員が開発した教材を共有する機会を作ることができれば、双方にとって価値の取組になる可能性があるように感じた。英語で発表・質問するという課題を与えられたことで、英語を話さなければいけない場について多少プレッシャーを感じた。しかし、教師から「何でも質問してよい」と言われ、さらに分からなくてもサポートしてもらえると考えるとその不安は軽減したように思う。

(2) 第2回研究交流会

日時：2022年6月24日(金) 18:00～19:30

参加人数：鳴門教育大学7人、

アフマドダフラン大学20人

発表者：鳴門教育大学 石原優人、

アフマドダフラン大学 Sindi Tiyasari

発表内容：鳴門教育大学『日本における外国につながる子どもたちの教育課題に関する分析』
アフマドダフラン大学『授業と学習者の課題解決能力を高める問題解決学習型 e-MODULES の開発』

質疑応答：

(鳴門教育大学→アフマドダフラン大学)

- ・大学で何を学んでいるか。例えば、教授法や数学など。
→大学の授業では、分析手法や学習のための方法論などを学んでいる。
- ・大学で e-MODULES を学ぶことのできる授業などはあるか。
→ない。私たちは本などを活用して学んでいる。
- ・数学で一番好きな分野はなにか。
→好きな分野は代数学である。
- ・大学院を卒業した後、海外に行く予定はあるか。
→海外で勉強を続けたいと思っている。
- ・インドネシア政府は、国の政策として ICT 環境を整えていくために何をしているか。
→インドネシアでは、まだそういったものはない。しかし、各教科に教えるアイデアがある。
- ・誰が e-MODULES を作成しているのか。
→e-MODULES は自分たちで作っている。
- ・どの学年で研究を進めるつもりか。
→高校レベルで行うつもりである。10年生を対象にしている。
- ・研究に参加している人は誰か。
→参加者は学生である。10年生が参加している。

(アフマドダフラン大学→鳴門教育大学)

- ・日本に、インターナショナルスクールはあるか。
→ある。
- ・発表の中で SDGs をキーワードとしてあげていたが、

SDGs の観点からあなたはどのように研究を進めていくのか。

→特に SDGs ゴール 4 の観点から研究を進めている。具体的には、日本国籍を持っている子どもたちは学校に通うことができる。しかし、外国籍の子どもたちは学校に通う義務がない。SDGs は「誰一人取り残さない」ことを目標としている。外国籍の子どもたちが学校に通うことができない状況は誰にとっても良いこととは言えず、私はこの状況を変えたいと思っている。

・なぜその研究方法を使うのか。

→多くの先行研究では、学校現場からの視点で語られており、学生の視点から研究したものは見当たらなかった。こうした研究は 2000 年台半ばから登場している。しかし、現在に至るまで大きく改善されたとは言いがたい状況である。そのため、外国につながる子どもたちの生活実態調査を行いたいと考えている。

・日本政府は外国籍の子どもたちに対してどのような日本語支援政策を行っているのか。

→日本政府ではなく、地方自治体を中心となって日本語支援政策を進めている。

・日本政府に対してどのような期待を持っているか。

→私見ですが、日本国憲法は外国人市民に対して差別的に捉えられる部分もある。私は国籍にかかわらず教育を受けることができる国であってほしいと考えている。憲法を変えることは難しいかもしれないが、市民教育を積極的に行い、ともに社会を作る市民として生きていけるように努力していく必要があると思う。

発表者の所感：

本交流会の1週間前に日本人グループでミーティングを実施した。その際に、多くの意見や助言を受け、自分の発表に際して多くの改善点を見つけることができた。それから時間はかかったが、納得できる発表資料を作成することができた。今までは、自分一人で何かをすることに意義を感じていたが、一人の力ではなく、自分の弱さに気づき、仲間の意見を取り入れることが大切だと感じた。

研究交流会では、両者の発表に対して積極的に一人ひとりが質問することで活発な意見交換ができた。特に私の所感としては、非常に有意義な発表会であったと考える。具体的には、英語を用いて発表し、質問に答えるという経験は私にとって初めてであり、非常に有意義な経験であった。また、英語を話すという不安に関しては、私自身英語の発音に自信があるわけではないため、大きな不安を抱えていた。しかし、不安を抱えて楽しむことができなければ

ば悔いが残ると思い, 気持ちを切り替え, 楽しんで発表することができた. 相手がうなずいていると自分の英語が通じていると感じることもあった. しかしその一方で, 反応がなく表情が曇っているときは納得できていないと感じた. また, 質問を受けてから返答するまでに時間がかかってしまった. しかし, 他の参加者や指導者のサポートにより, 適切に対応することができた. 他にも多くの良かった点や改善点が見つかった. もし, また発表する機会があれば, これらの反省を生かし, 準備したい.

(3) 第3回研究交流会

日 時: 2022年7月21日(木) 18:00 ~ 19:30

参加人数: 鳴門教育大学7人,

アフマドダフラン大学19人

発表者: 鳴門教育大学 谷川夏菜子,

アフマドダフラン大学 Lia Rahmawati

発表内容: 鳴門教育大学『中学校英語教育における学習者の不安について』

アフマドダフラン大学『学生の論理数学的思考力を高める問題解決学習型 e-MODULES 教材の開発』

質疑応答:

(鳴門教育大学→インドネシアの学生への質問)

- ・いつから第二言語を学習しはじめたか.
→第一言語はJava(ジャワ語)で, 第二言語はインドネシア語である. 第三言語の英語は, 小学校に入ってから学習を始めた.
- ・インドネシアの英語の授業のなかでは, 何が特に勉強されるか.
→文法などの知識が中心.
- ・英語の授業の中でどんな時に, 不安を感じるか.
→中学校から今までずっと不安を感じる. 特に, 英語でコミュニケーションをとるときに不安を感じる.

(アフマドダフラン大学→鳴門教育大学)

- ・授業外での英語学習を継続するために, どのような学習方法があるのか.
→モチベーションを高めることが大切であり, そのため英語の音楽などを使用することがある.
- ・日本とインドネシアの英語教育のシステムはほとんど同じであるが, なぜ日本人は英語が上手なのか.
→英語を上手に話す人もいるがそうでない人もいる. 人による.
- ・日本語の他に, 話す言語は何か. 英語以外にあるのか.
→基本的には英語. 学校教育で中国語などその他の言語を選択できる場所もあるが, ほとんどいない.

(鳴門教育大学→アフマドダフラン大学)

- ・e-MODULEは, 自分で作ったのか.
→はい, そうです.
- ・e-MODULEを作成するアプリは何か. 作成にどのくらいかかるのか.
→Flip Burdenというアプリで作成するのに3か月くらいかかった.
- ・日本でも使用可能か.
→日本でも(誰でも)簡単に作成可能である.
- ・e-MODULEを作成するためには, 何か特別なスキルが必要か.
→特別なスキルは必要ないため, 誰でも簡単に作れる. しかし, ビデオやワークシートを挿入したい場合には, 作業に3か月ほど時間がかかる.
- ・研究の成果として, 生徒にどのような力を身につけることを期待しているか.
→e-MODULEを使用して, 生徒の数学的思考力を高められることを期待している.
- ・e-MODULEは, インドネシアの数学の新しい教育方法か.
→e-MODULEは, まだ一般的なものではないが, コロナ禍での学習の幅を広げるための一つとして注目している.
- ・数学は好きか?
→はい, 好きである.
- ・e-MODULEは, 数学が苦手な生徒にとって効果的な教材になると思うか.
→内容も実用的であり, ビデオやキャラクターなどが挿入されているため, 子ども達は楽しんで学習することができると思う.
- ・数学以外の教科でも, e-MODULEは活用できるか?
→はい, 他教科でも活用できる.
- ・e-MODULEの中には何かアクティビティがあるか.
→アクティビティはないが, 生徒にとって身近なものを問題のテーマにしている.

発表者の所感:

3回目の交流ということもあり, 参加者の中には交流や場の雰囲気に慣れたのか, 落ち着いた様子でインドネシアの学生とコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた. 具体的には, 相手国の言語で挨拶してみたり, 笑顔でお互いに話し合ったりする様子が前回までの交流と比べると増えたように感じた. インドネシア側の発表において, 日本側が今まで疑問を抱いていたe-MODULEの具体物を示してくれた. そのおかげで, 相手の研究内容の理解を深めることができ, オンライン教材の興味や関心がさらに高まった. また, 日本側の発表に関連した英語と不安について話し合うなかで, インドネシアの参

加者たちも私達と同じように英語を話すことに対して不安を抱え、苦手意識を持っていることが明らかとなった。個人的にも今回が初めての英語での発表であったため不安や緊張感があったが、沢山の人に助けをもらいながら事前準備をしっかりと行ったことで不安を軽減して発表に臨むことができたと思う。しかし、質問に対する回答など英語を使って即興で話すことの難しさを感じたため、「文法などの間違いや失敗を恐れず、思ったことをまずは試してみる事が大切である。」という指導者のアドバイスを参考にしながら、今後の個人的な課題として改善に努めていきたい。

4. 各活動後の省察会

オンライン研究交流会に参加した本学の学生のみで、各活動後に省察会を実施した。省察会の記録を用いて、グローバル人材としての自己の変容やそれに寄与した要因について考察することを目的として、自分自身が自分自身のことを研究対象とする自己エスノグラフィを行った。具体的には、各交流会後、参加者で約1時間の省察会を行い、発言をすべて記録に残し、SCAT法を用いて分析した。分析結果を、「グローバル人材としての成長」という視点から研究交流会参加者の心理的变化を総合的に考察した。ここまでの気づきとして、プログラム開始当初、「英語でプレゼンテーションを行うこと」、「英語でのプレゼンテーションを聞くこと」、「相手の発表に対して必ず英語で質問をすること」に、不安やプレッシャーを感じていた。しかしながら、回を重ねるごとにプログラム参加者間の信頼関係が築かれ、環境面での安心感が得られたことにより、英語を用いることへの不安感が軽減された。そのことが、質問をすることへの抵抗感の減少につながった。また、自身の質問が相手に伝わったという成功体験から、自信が少しずつ高まっていることをこれまでの省察会の記録の分析から明らかとなった。今後も交流会を重ねることにより、新たな自己の変容やその要因が見つかることが期待できる。本研究の成果を、2022年10月21日(金)～23日(日)に行われた、「グローバル人材育成教育学会第10回全国大会・第3回国際遠隔会議」において発表した。

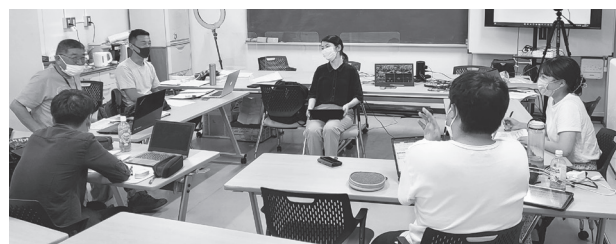


図2. 省察会の様子。



図3. 学会発表の様子。

5. おわりに

本プログラムは、当初インドネシアのアフマドダフラン大学へのスタディツアーを想定していたが、コロナ禍により現地への渡航が実現できないため、オンラインでの研究交流会を定期的の実施することとなった。オンラインで外国の学生と研究交流することだけでも大変意義深い活動であるが、本プログラム参加者が、自分自身のグローバル人材としての成長に関する当事者分析を行い、その研究成果について学会発表を行うところまで活動が発展した。今後も定期的にオンラインで研究交流会を続け、年度の後半(2023年3月)にアフマドダフラン大学を訪問することを予定している。結果として、オンラインで1年を通して研究交流を続け、最後に現地を訪問して対面で研究交流を図るという、今後のプログラム形成への示唆ともなる理想的なプログラムとなった。